

放牧に関する用語解説(2)

北海道農業試験場草地第1研究室

高 畑 滋

ストリップ放牧 带状放牧という意味で一回または一日の放牧に必要な面積だけを柵で区切って採食させる方法で、きわめて集約的な輪換放牧の一種といえることができる。耕地の狭い農家ではさらに集約的に、ストリップの幅をごくせまくして牛が顔を出して採食するだけの幅にして足を踏み入れさせない方法をとっている例もある。これは蹄傷や糞による汚染など放牧によるマイナス面を避ける利点があるが、時間制限放牧をしなければならないのと柵をこまかく移動しなければならないので労力はかかる。また、多頭数飼育では無理な方法である。

林間放牧 林業と畜産とを両立させようという放牧法。林地造成後に下草刈りなどを省き、逆に林内の草資源を活用しようというものであるが、樹種によっては家畜の趣好性が高いものがあり気をつける必要がある。採食されなくても、踏んだり、体をこすりつけたりにして枯損させる率が高いが、一応10～20%くらいの損傷を覚悟しておいてあらかじめ多く植えるなどの手をうっておけばよい。

カウデー (放牧日) ある草地が家畜をどれだけ養っておけるかという牧養力をあらわす基準で、おもにアメリカで使われている単位。成牛(500kg)を家畜単位の1として1～2年生の犢を0.7、1年未満を0.12とする。家畜単位1のものを1日間放牧するのを1カウデーとする。半日であれば0.5、体重が小さいものはそれなりに減じていく。結果として1haに5頭の成牛を150日間放牧できたとする750カウデーの草地と表現する。ただし、別な草地と比較する場合には、同じ放牧方法をとっていることが必要なので、ある放牧条件下で結果としてあらわれる数字なので客観性にとぼしいのが欠点であるが、実用的には一つの目安となろう。このほか牧養力をあらわす単位にはG P U(グラスランドプロダクションユニット)というのがあり、増体量、乳生産量、基礎体重とから推定する方法もある。

し好性 (パラタビリティ) 刈り取って給与する青刈法とちがって、放牧では家畜が自由に選択して採食するので、どうしても家畜の好みによってよく食われる草と、食われない草がでてくる。家畜が好んで食う草は、結果的には栄養摂取量も高くなり生産に良い影響をもたらすので、草地は家畜の好む草を主体に造成したいものである。草類の育種家達も耐病性や生産力ともあわせて、このし好性を育種目標の重点と考えるようになってきた。しかし、同じ草種でも、草地の状態によってし好性はかなり変化するので、実際家の立場からは、管理によって常に高いし好性を保つように心がけたい。

不食過繁地 家畜の糞の跡地は採食されないのと、肥料分の影響とで過繁茂の状態となる。掃除刈りをしない場合にはこのような不食過繁地が点々と目立ち放牧地特有の景観を呈する。利用率が下がるのでこれを気にする農家も多い。なぜ食わないか原因をたしかめた実験では糞の臭いが一番影響しているという。いっぽう、牛が生理的に嫌うので新鮮糞からの内部寄生虫の感染をまぬがれているという面もある。掃除刈りや糞の掻き荒らしをすることは、糞を乾燥させたり分解を早めたりして不食過繁地をつくらない対策の一つになる。また、放牧強度を強めれば不食過繁地が減り、軽い放牧ではふえることも観察されている。

放牧病 放牧中に発生する病気は多い順にあげるとピロプラズマ病、胃腸カタル、鼓脹症、下痢症、外傷、皮膚真菌症、趾間腐らんなどである。公共草地のように放牧前の飼養管理が異なり、病気に対する免疫性のちがう家畜を集団放牧する場合には、個々の家畜を舎飼にしている時とはちがう発病のしかたがみられる。これらを総称して放牧病といっている。このうちピロプラズマ病は病牛中の40%にのぼり、死亡率も30%程度と高いので注意が必要である。ピロプラズマ病は、顕微鏡でしかみえない小さな原虫が、血球中に寄生し、貧血と発熱をおこすものである。この病原体を媒介するフタトゲチマダニは全国中に分布するのでどこでも問題となっている。ピロプラズマ病が出た牧野では、短時日のうちに放牧家畜全部が感染すると考えたほうがよい。一般に幼令期に感染し軽症ですんだ牛は免疫があるが、放牧中の健康管理を十分におこなわないと重症になる危険もある。定期的に投薬して病原体を殺すことは効果がある。

放牧行動 (グレイジングビヘイビア) 放牧管理のうえで一つの指標となるものが放牧家畜の行動である。慣れた管理者は、放牧行動をみながら次にうつ手を考えられる。ふつつ放牧草地での家畜の行動には一定のリズムがあり、それは、採食、遊歩、反すう、休息などからなりたち、草地の状態、気象条件、牛群構成などであるパターンを示す。これらのバランスがくずれた時は放牧上何らかの問題があるとみてよい。たとえば、きまった時間にいっせいに反すう行動に入らないときには、飼料草が不足していると判断されるなどである。一般的にいえば、昼夜放牧の場合、採食行動は8時間くらいで、食事時間として集中的に採食するのがふつつであり、その時間帯は、早朝、ひる頃、夕刻、日没後などにみられる。この採食の時間には、牧区の大きさ、牛群構成によってもちがうが、ボスを先頭に全体が同一方向をむいて整然と移動していくのが特徴である。